

# 安倍能成

自己の問題として見たる  
自然主義的思想



自己の問題として見たる

自然主義的思想



## 一

自己の問題としてというのは、個性若しくはセルフの問題という意味と、単に自分一個の問題としてという意味とを含めてである。之<sup>これ</sup>については今までに時々所感を陳べたことはあるが、多少之を纏めて書いて見ようと思うと、自分の現在の気持が殆ど之に適しないことに気がつく。一口に自然主義といっても、文芸上の自然主義とか

実行上の自然主義とか、様々に分けられることでもある  
うが、之とても全く峻別しゅんべつし得られるものではない。兎  
に角今は此等を総括して自然主義的思想とした。議論中  
或はこの辺に多少の混雑が生ずるかも知れない。又自然  
主義思想を論ずるといっても、本当は文学史とか思想史  
とか文明史とか社会史とかの上から論ずべきものでもあ  
ろうけれど、これは本論の敢て企図する所ではない。要  
は自分と自然主義的思想との交渉をかいて見たいという  
につきる。自分一人の便宜よりいえば、向後なおこの問  
題について考える稗しおりにかきとどめておきたいのである。

我々の経験した思想感情の傾向の上に、ロマンチックと呼ぶを得べく、又ナチュラリスチックと呼び得べき傾向があつたのは事実である。それが果して文学史や哲学史でいう所のロマンチズム、ナチュラリズムであるかは、ここに問おうとする問題でない。又それが我が国の文壇で論ぜられたロマンチズムやナチュラリズムに厳密に吻合するといふことも、自分の必する所ではない。

唯自分達の心持が今の思想界の大体の風潮に追随し、自分達の思想感情が此等の思潮に影響せられて、自分等の上にも少くともロマンチック又はナチュラリスチックと

呼ばれ得べき時期のあつた、もしくは現にあるのは事実だといふのである。

かくて仮に此等の時期を自分達の浪漫主義時代もしくは自然主義的時代と呼ぼう。此等の時代は自分にとって全然満足すべき時代であつたかといえば、固よりそうではない。しかしながら自分の此等の思潮に対する関係は、決して之を超越して居たのではなくて、此等の波瀾の間に浮沈して居たのである。だから自分は世間の学者先生の如く、ロマンチズムは浅薄だ、ナチュラリズムは外道げどうだと、頭からけなしつけられる位置には居ない。その度



の深淺は今問わず、兎に角自分達はロマンチックな思想感情、ナチュラリスチックな思想感情を経験した。この篇に於いては、主として自己の経験としての自然主義的思想を批評して見たい。それも自己を如何にすべきかという問題と結びつけて論じて見たい。

## 二

日本の文壇に浪漫主義の時代があったとすれば、それは主として故の高山樗牛氏の晩年時代であったと思う。

樗牛氏はこけ威おどしだといひ、浅薄だといひ、様々の難点を打つ人はあるけれども、兎に角氏の晩年の言説が非常に当時の青年を動かさし、之に多大の影響を与えたことは否定することが出来ぬ。尤もつとも今からして考えればどうしてあんなに動かされたのだらうと思ふ所もある。今にして思えば樗牛氏の言説には多少の誇張もあり、数々の粗笨そほんな点もあつた。大体に調子にアムビシアスな所が抜けて居なかつた。しかしかく物足らなく思ふのも、主としては時代の推移によるのである。当時の自分達は、樗牛氏の主観的な感情的な（感情的といつても青年の好こう

尚しやうに適する元気な所があつた）個人主義的思想には  
 實際ひどく動かされた。自分は古い時代の文壇や思想界  
 のことを知らないが、兎に角自分達は氏によつて粗笨な  
 がらも「我」というものを教えられ、「我」の自覚を有  
 するに至つたと思う。我等はあたか恰も恋するものの如く、  
 このロマンチックな心持を、きわ極めて華やかに涙多く、熱  
 き血のめぐりもて経験した。

この時に於いては、我等は多く自己を省察したり批評  
 したりする暇がなかつた。むしろむくむくと新たに起つ  
 て来た私の自覚の、熱くして抑え難いのを感ずる有様で

あつた。我等は何とはしらず偏<sup>ひと</sup>えに「我」の力を感じた。そしてこの力の感じをもつて、向う見ずに当りちらしい様な心持であつた。我なくば人生も世界もない、我を離れては国家も家庭も何でもない様に感じた。我は一切である、我なくば無である。されば我等にとって最も確かな判断は、我等の主観的判断でなければならぬ。我等のこの判断を外にしては何物に従うのも断じていやである。我等が今迄の方便的な倫理道德や忠君愛国説を一蹴し去ろうとしたのも決して無理ではない。我等の情感は兎に角高潮に達した。熱烈奔放時には死に迫らんとさえ

した。我等の刹那を以て永遠だと思い、我等の経験を以て全部だと思った。当時我等の認むる真は主観的の真であつた。我れかく感ず故に真なりといふのである。感情の焰ほのおと熱とを以てい圍繞ようせられた真であつた。その懷疑は一切か皆無かの懷疑であつた。to be or not to be の懷疑であつた。自分の主観的要求の充みたされざる所、世界を空じ去らんとする勢であつた。若し我等にして其當時に死に得たら、恐らく遺憾がなかつたであろう。

しかしながら熱烈はあつても堅実は乏しかつた。奔放はあつても鍛練がなかつた。むくむくと新興の勢に乗じ

て<sup>あが</sup>挙る自己の主観は、あまりに燃え上って空想に流れた弊がある。自己というものが余りに抽出せられて、却て其の基礎を失うの弊があつた。自己の存在を認めただけで、自己の何物なるやを省察する暇がなかつた。自己の力を感じて、其の力量限度を知らなかつた。燃え立つた火の弱るべき時は来らざるを得なかつた。

## 三

ロマンチックの思想感情に伴うものは、宗教的の憧憬<sup>どうけい</sup>

の心である。我等の清新なる主観が、偏に善美なるものを思慕して止まなかつたのは此の時代であつた。「心の清き者は常に思慕す」と云わるべき時代が我等にもあつたとすれば、それは実に此の時であつた。

高きが上にも高きをきわめたいと、そぞろに燃え上る我等の心は、何とはなしに唯あこがれの対象を求めめる心持であつた。故の綱島梁川りようせん氏の思想が自分達に影響を与えたのは、この時であつた。梁川氏の思想は文芸的な我等の心持を更に宗教的にした。梁川氏は樗牛氏に比べて遙はるかに深く又地味に自己という問題に沈潜した人であ

る。他を顧みずあくまでも真面目に自己の真満足を追おうとした敬虔の態度は、樗牛氏の及ぶ能わざる所であると思う。或は梁川氏を以て宗教を文芸に墮せしめたという人があるが、これは当らざるの甚しきものである。自分の考える所では、梁川氏は道德から宗教へ這入った人である。真に道德的なる人はどうしても宗教的でなければならぬと思う。梁川氏は其の感情の純真にして愛憐あいれん同感に豊かなる、その克己心に富める点に於いて、夙つとに道德的天才であつた。自分は実に氏を以て道德を徹底せしめんとして宗教に入った人であると考えゑる。



この点に於いて同氏の思想は、あくまでも質実であつて浮誇がない。直観を重んじたけれども、苟いやしくも之を放たずして、右からも左からも之れを検覈けんかくし究尽するといふ風があつた晩年見神の實驗を説いた後の思想は、大分変化があるけれども、それまでの同氏の思想歴史を見ると、如何に自己の修養があり、工夫があり、思弁があるかが分る。要するに終始真面目を以て一貫せること氏の如きは稀まれである。兎にも角にも氏の真面目で堅実な思想は、樗牛氏の思想の浮誇の分子に物足らなかつた我等を動かした。

梁川氏の思想は一言にしていえば宗教的といふのであろうが、其の内にもやっぱり主観的で個人的であつた。氏の言説には感情を檢覈する理性の声があつたことは、前に述べた通りであるが、これは先<sup>ま</sup>ず情意の価値的要求を前提してのことであつた。殊に晩年に至つては、あくまでも衷心の感情の声を重んじた。之を要するに梁川氏の問題は、主として自己の要求といふことにかかつて居た。氏は終始にたゆみのないこの自己の要求を持つて居た。又持たないで居られなかつた。この事を考える度に、自分は実に氏の一生を高しとせざるを得ぬ、又氏の幸福

を羨うらやまざるを得ぬ。自己の切実なる要求を有すること、之にもまして切実な人生が何処にあるか。これにもまして人生に触れる道があるか。氏にあつては理想の檢覈とは、主として自己のこの要求に加えられた思弁であつた。氏の一生の努力はこの要求を純にし、明かにし、高くし、大いにせんとするの方便に過ぎなかつた。自己の問題が梁川氏によつて深く立ち入られたことは固より絮説じよせつを要しない。

氏の宗教的要求は、其堅実の度に於いても根柢の深い点に於いても、自分達とは遙に選を異にした。我等の燃

え立った主観が大分下火になって、我等がそぞろに自己の主観の空漠に気付き、自己の平凡を感じ、下劣を卑しみ、泉の如く出た熱涙が乾いて、暖い血の循環めぐりも冷かに遅滞し、はやくも疲れはてた時に当って、殊にも我等の弱った感情のすきまに乗じて、物質的な思想が頻りに勝を占め、我等の価値的判断を鈍らした時に当って、梁川氏の思想はあくまでもたゆみない自家の要求を載せて、漸く他力感恩の生涯にまで入らんとした。我等は之に追隨することが出来なかつた。

## 四

この時に當つて自分の気持は大分自然主義的になつて居た。自然主義の小説が興味を引きだしたのもこの頃である。自然主義の小説のあるものは、自分の思想や感情に近いものを表現して居た点に於て、たしかに自分達を引きつけた。自分は固よりロマンチズムの渴仰者であつた如き意味に於て、自然主義の渴仰者ではなかつた、又固より鼓吹者でも何でもない。唯いやいやながらも自然主義的なる思想感情を経験したという意味に於て、自

然主義の実行者とはいえる。固より世間普通にいう自然主義の実行者の意味でないことは断わっておく。世の迂<sup>えん</sup>遠なる学者が、権威ある者の如き容して、十分なる洞察も同情もなく、自然主義を攻撃した言説の如きは、自分も亦片腹痛く思った。さりながら自然主義的思想は到底自分を満足せしむるものではない、之に対する不満足之感は次第に高まって来た。自分は今自然主義の実行者という位置から、自然主義の批評者という態度にかわつて来たことは、自ら欺くことなくしていい得ると思う。

自然主義の議論は多くは読まない。しかしながら自然

主義を一個の主張として、之を維持しようとする時、どれだけの理論的特色と根拠とがあるであろうかということについては、自分は前から多くの疑なきを得なかつた。自然主義が猛然として主張せられたのは、ただその消極的方面もしくは破壊的方面にあつたのは、自然主義そのものの性質に基づくことと思う。されば形の整えられた自然主義論となると、いきおい勢自然主義その儘よりは、幾分か理想的分子の加わつたものとなる姿がある。要するに自然主義の強味は、その理論的根拠にあるのではない。否かくの如きものは殆ど論理的遊戯として排せられて居

るくらいである。その強味は主として今の人の現実感にある。その価値は問わざれ、その美醜は論ぜざれ、その善悪は分たざれ、兎にも角にもこれが人間現在の実状ではないか、現実ではないかというのが、自然主義者の振り回す鉄棒であつた。しかもこの鉄棒の打撃力の強いことは、いかにも認めざるを得ない。ただ我等はどうしても、この鉄棒にたたきすえらるべき運命より脱するところが出来ぬか、又脱しようとする努力さえも、叱らるべく罵らるべきものであるかは、自ら別問題に属する。

自然主義者のモットーは真である。要するに真を求め



て真に従うというのである。自然人生の真を発見して、之を描写するに真に忠なる筆を以てするというのが、自然主義の文学ならば、真を発見して真実なる生活をするというのが、自然主義的実行であろう。唯一言にかく考うれば、固より間然する所もない、問題の起り様もない。

しかしながらここに問うべきことは、真とは何ぞやと  
いうことである。卒然としてかく問うても、それは、善  
とは何ぞや、美とは何ぞやというと同じく容易に答えら  
れざる問題である。島村抱月氏の「文芸上の自然主義」  
という論文の中には、理想といい現実というのは、要す

るに第二義のことである。第一義なるは即ち真であると説かれて居る。しかしその議論だけでは、第一義の真と現実というものが、如何なる関係を有して居るかは十分に明かでない。第一義的の真というのが超絶的な本体的なもので、現実とはその属性とか現象とかいうものであるかといえは、必しもそうでない。然らば現実と第一義の真とは同一物であるかといえは、必しも亦そうではない。この事については已すでに前にも一度いったことがあるから大抵にしておくが、要するに自分の考では、第一義の真というものは、自然主義論者の多く重きを置く所

でない。仮に第一義の真を認めるとしても、その力説する所は主として現実の方である。よし又百歩を譲って自然主義論者の力説する所が、第一義の真にあるとしても、これは自然主義なるものの特色をなす所以のものではない。第一義の真という如きは一種の価値意識、気分であつて、これは決して自然主義に限つたものでない。否むしろ之に遠いものである。自然主義者の力を注いだ点は、主として現実にあつたことは、誰人も異議はあるまい。

然らば現実とは何であろうか、これには種々説もあるが、兎に角現実ということが、経験の主体たる我等人

間を離れていい得られないことは明かである。心理的にいえば我等の経験分内のことと広くいつて差支なかるう。しかし之を更に普通の意味に解すれば、要するに我等にとって切実なインテンスな経験ということである。そこでこの経験により之に交渉する者は等しく又現実の中にこめられる。要するに此等のものも我等の経験分内のものであるからである。

かく現実を解すれば、現実の真なるものが決して一色なものでなく、一定不変のものでないことは明かである。個人個人の性格境遇により、或は広く一代一社会の生活

状態思潮等によつて、千差万別であるべき筈である。この意味に於て現実の真とは、理想とか原理とかが普遍的又は抽象的であるのに対して、個体的又は具体的であるといひ得られる。普遍的なる理想は、動もすれば内容が薄れて抽象的になり、我等の生活に切実でなくなる。自然主義が力を込めて現実を説かんとしたのも実にこの点にある。しかも現実が具体的であるだけそれだけ多端で、現実の真とは何ぞやの問の発せらるるや。何れを何れとも分け難き繁雜が生じ、之を選択する必要に迫らるる形勢は、已に已にこの当初に存するといわなければならぬ。

## 五

かくの如く現実の真なるものは個体的で多端である。しかしながら今の人の現実というものには、自ら通じて居る一般性がある。そして今人の現実の理論的根拠を与えて居るものは、十九世紀以来長足の進歩を続け多大の勢力を振って居る自然科学の精神である。

我等の科学的知識は精確でなくても、我等が科学的精神の影響をうけて居ることは事実である。科学的精神が

我等に与えたものは、物質的世界観人生観であつた。その巨細こさいの消息については十分に説明し得る知識を有しな  
いけれども、兎に角我等の物の見方が精神的でなくて物  
質的になつた。我等の経験には精神よりも物質の方が有  
力になつた。精神的事物よりも物質的事物の方が、より  
多く現実になつて来た。我等が沈思し、瞑想し、感慨す  
る所を空と見、無力と見、偏に我等が視、聴き、嗅ぎ、  
触れ、味う所のものを確實なりとするに至つた。かくて  
この世界をば大いなる物質の盲動と見る器械観的の傾向  
が我等に生じ、人間が人間自身を見ても、精神的により

は、生理的、物理的、一言には物質的に見る様になった。物質というものも、科学の方では要するに自然を説明するに最良であるけれども、我等が普通常識的に考える物質は我等の現前にある具体的なものである。かく総てを物質的に見る事が、総てを外的にギブンファクト已定の事実として見る様に至らしむることは、誰人も経験する所である。かくて世界というものが、動きの取れない自由のないデーターミニスチックなるものとなって見えて来る。万事を程度の差と見、質的に見ないで量的に見る。神秘が失せう非凡が消え、平凡が跋扈ぼつこする。宗教や哲学は動もすやれば嘲



笑せられ、偉人豪傑も我等と異なる点は、唯量的物質的のエネルギーの差と觀ぜられる傾きが生じて、英雄崇拜の情けも冷却せざるを得ない。

現実の眞の主張が科学的精神の後援を受くる如く、この科学的精神の拡布が、世人一般の現實感に援け<sup>たす</sup>られて居ることは、蔽<sup>おお</sup>われぬ事實であろうと思う。科学殊に自然科学の応用的方面は、科学を知らざる凡俗をして、科学の勢力に驚嘆せしめることが出来る。思想界のデモクラシーの勢を馴<sup>じゆんち</sup>致したのは科学的精神である。従って科学の大影響を受けて居る自然主義文学もデモクラチック

の文学である。しかし自分は今科学を論じようと思つて居るのでない。自分のいいたいのは、我等の自然主義的現実感に裏書きしたものは、我等の多少の科学的知識であるということである。或る論者のいった如く、我等にして普通学の教育を受けて居なかつたならば、自然主義的の思想に動かされることは少なかつたであろう。肉欲是非の問題にしても我等の科学的知識が少なからず關係して居ることは争われまいと思う。

しかし若し我等にして全然科学者となり了して、万事を冷かに知的にながめることが出来れば、我等は極めて

安きを得たであろう。誠に「真を求めて真を得たり」、  
 又た何の憾うらみとする所もない、  
 哀かなしみとする所もない。何  
 の現実暴露の悲哀ぞ、何の懷疑ぞ、何の不安ぞ。然も事  
 実は決してかくの如き簡単なる帰結を与えない。

## 六

更に又自然主義文学の材料となる、即ち自然主義にい  
 う所の現実の主なるものは、現下の個人や社会の生活状  
 態、及びこれから起ってくる様々の社会問題という様な

ものである。これは主として西洋の社会の事実であるけれども、日本人殊に我等青年にとりては、決して無関係の問題ではない。よし百歩を譲って此等を対岸の火災と位に見ても、しかし我等の興味を引くことは、日本の古い歴史の比でないことは事実である。しかしながら自分等は此等について陳べるだけの知識は固より有して居らない。唯自分は一方に於て個人の自意識が段々強くなると共に、又之を圧迫する様な事実が又段々増して来る、近代の人間の状態は、自分にとって決して風馬牛のものではないと思つてゐる。

西洋近代の思潮は自由的、個人的なのにあるときいた。これはそうであろうと思う。しかしながら社会の組織が愈々緊密になり、生存競争が益々激甚ますますとなるに従って、個人が与えられた自由を振う余地が乏しくなつて、個人と社会との衝突矛盾という様なものが生じて来て居ることも、亦事実でなければならぬ。個人の自意識、自由の要求、之に加えられる圧迫の感は、我等にリアライズすることの出来ぬ気持ではない。我々の一方に於いて自意識を棄てることが出来ないのに、他方に於いて我々の自己の見方即ち物質的な見方は、我々自身をも量的に外的

に生理的に感覺的に見んとする。かくて我等は類型的の自己を意識させられる。自意識が強くて自己の弱いという様な矛盾に苦められる。我等は自動的なる自己を意識せずして、受動的なる自己を意識する。進んで走る自己を意識せずして、引きずられて行く自己を意識する。天に翔かけらんとする自己を意識せずして、地に繋つながれたる自己を意識する。我の自由を意識せずして、我の運命を意识到する。昔は自己を意識して居たものは、獅子や虎ばかりであつたかも知れない。今は兎や鼠も自己を意識せず居られない様になつた。

上の如き状態を現代の現実の一面として見れば、我々は何も現実に満足して居るわけではない。現実を樂に享受して居るわけではない。いやでも応でも無理に現実におしつけられて居る形である。見ざらんとしても見ず、聴かざらんとしても聴かざるを得ないのである。そして自然主義者の現実の説の根拠は主としてここにあるのではないかと思う。自然主義の強味は主としてこの方面に置かれて居る。

例えばここに或る文学者が人生の真を描く為に肉欲を描いたとする。若しこれが唯単に上に止まるとどならば、何

もこれが特に人生に触れた文学であるという理由とはならない。かかる小説の意義が認められるのは、肉欲というところが現実の生活にとって真面目な問題となり得る時、又はなり得る様に描かれた場合に限るのではないか。かくいうは人生に触れたということが、いつの世いかなる人の人生にも触れるという意味に限らないことを明らかにしたい為である。自然主義の文学が人生に触れるという言も、委<sup>くわ</sup>しくは現代の多数の人の人生に触れるというべきであると思う。

かくの如き意味に於いて、自然主義にいう現実の真と



は、与えられたる事実である。自己さえも与えられた自己と呼ばれるべき形がある。自然主義者の先ず見よ、価値づくる勿れなかという言葉は、この現下の状態に於いては、少なくとも是認せられることである。さりながら与えられたるを与えられたるがままに、定められたるを定められたるがままに承認するならば、我等は必しも眼を開いて見ることゝを要しない。眼をつぶつても之に従えばよいのである。ここに於てかその真相を見よというモットーすらも、我等の価値的要求を背景とせずば、何等の人生的意義を有せぬことになる。懐疑を懐疑として、不安を不安

として眺めることの出来ぬ理由もここにある。否自分は更に一步を進めて、刮目かつもくして真相を見んとする努力すらも、我等の価値的要求からして送られるのだといいたい。若しこの要求だにもなくば、我等は現実の中に眠りこけてしまわねばならぬ。それはさて置き兎に角、現実に逢ほう着ちやくし、現実を享受し、或は之を楽しんだり悲んだり、或は耽溺たんできしたり圧迫されたりする間が、現実を現実とする自然主義の領分である。人生を無理想だ無解決だというもの、この領分内のことである。一步を進めて之を批評する様になるのは、更に後の事柄に属する。これ已すでに我

等が価値的要求を提げてこれに臨んだ場合である。しかもこの価値的要求の浅薄ならざらんが為には、我等の人生を味うことも亦深くなければならぬ。現実に触れよという言の強味は主としてこの点にかかる。然も現実に深く触れるということも、我等の価値的要求にデペンドして居ることである。自然主義が其自身に於いて完了しないというのはかかる意味であらうと思う。

## 七

自分は上述する所によつて自然主義的現實を略説した。自然主義的の心持に居る自己について少しく述べた。自然主義的気分の下にある自己が、主として感覺的、受動的、物質的の自己であることをいった。極端にいえば我等は牛や豚の如く無意識的になり得ない、然も自己の最も牛の如く豚の如き方面を見せつけられた。私の自覚を有せりといえは如何にも立派であるけれども、内容の貧寒空疎な荒んだ自己すきを自覚するとき、我等は自己の尊

蔽を覚えずして屈辱を覚える。幸福を思わずして苦痛を感ずる。然もこの苦痛屈辱に対する鋭き感じさえ動やもすれば鈍らされんとするのである。

かかる自己を以て人生に臨み、現実<sup>に</sup>接する。果してどれだけ人生に触れ得るであろうか。多くの外的経験を重ねることが、人生に触れることならば、詐欺師や泥棒は最も多く人生に触れて居なければならぬ。我等がしじみと深く人生に触れると感ずることが出来るのは、我等が清新な心持を以て人生に臨む時ではないか。ただ現実に触れるということは、決して人生に触れ人生を深く

経験する所以ではない。我等が人生に触れたいというのは、むしろ人生に触れざることを示して居るのではないか。徹底せよというのはむしろ徹底せざるを証するものではないか。充実したいというのは、決して充実して居ることと同じではない。真面目になりたいというのは、又真面目になることの難かたきをあらわして居るのではないか。我等は人生に触れない、せめて触れたいと思う意識でもって、人生との触接を続けようとする。我等は充実して居ない。せめて充実したいと思う心で以て、充実したいとする。真面目でない、せめて自己の不真面目の苦

き意識にも真面目を保ちたい。若々しき新なる心を失わんとする、之を痛ましく思う悲愁の心にも、せめて老人にない若さを託せんとする。しかもこれだけの充実、これだけの真面目も動もすれば保ち難いのではないか。

## 八

かくの如くにして現実の真なるものは、決して我等が求むる終局のものではない。我等を満足せしめるものではない。我等はこの不満を殺してしまふべきか。不満の

殺さるるは我等の死ぬる時である。我等は我等の現実をどうにかせねばならぬ。この要求を外にして人の生くる道はあるまい。かかる要求に押されて、そこに深味もあり張りもある自己の内観といい、自己の批評ということもある。自己を改革し、懺悔し、自己を造るということもここに至って始まるであろう。

されば個性といい、人格といい、自己という問題もここに至って始まることであって、今まで述べた如き意味に於いては、此等のものも極めて手薄なものに過ぎない。現実回避すべきものでなく、又回避せられるもので



あるまい。されど与えられたるものは必しも求められたるものでない。現実に対する不満は、やがて第一義的のものに対する憧憬どうけいとならねば止むまい。自然主義に於けるロマンチックの傾向は我等も等しく力説したいと思う。今は寧ろ我等の現実に対する不満、呪詛じゆその強からんことを願う。徹底的ならんことを望む。

(明治四十二年十二月)



日本文学電子図書館

---

自己の問題として見たる  
自然主義的思想

著 者：安倍能成

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 40  
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館